



# 今こそ 「国語力」

## 特集 —二松学舎大学

明治 10 年 10 月、漢学者であり明治法曹界の重鎮でもあった三島中洲は、東京・九段の自邸の敷地に「漢学塾二松学舎」を創設、二松学舎大学 140 余年の歴史がはじまった。

明治維新から 10 年、日本が西洋文化を取り入れようとするなか、中洲は「西洋文明の進んだ部分を自分たちのものにするには、まず東洋の文化を学び、日本人の眞の姿を知ることこそが重要である」と主張し、漢学を教授することで新時代を担う国家有為の人材育成をめざした。

近年、世界のボーダーレス化が進み、グローバルに活躍できる人材が一層求められる時代となった。そんな時代だからこそ、二松学舎大学は国語力を教育の根幹に据え続ける。



## 学生の活躍

# 「国語力」を発信力へ

二松学舎大学は、2017年に迎えた創立140周年を節目に「発信」や「活用」といった新たなキーワードで挑戦をはじめている。その主役は学生たち。国語力を発進力へと昇華させ、学外との接続に挑戦する二松学舎生の取組みを取材した。



写真上左：学生と外国人留学生の交流。「日本語・日本学プログラム」を通じ毎年約60名の留学生が二松学舎大学で学んでいる

写真上右：二松学舎オリジナルキャラクター「ねこ松」を囲む学生たち。夏目漱石の代表作『吾輩は猫である』にちなんで、140周年事業の一環として制作された

## アンドロイドを通じて漱石文学の魅力を発信

二松学舎創立140周年記念事業の一環として2016年に制作された「漱石アンドロイド」は、現在、大学や附属中学・高校生向けの朗読講義のほか、式典での挨拶や外部への出張講演、TV番組への出演など、活動の場を広げている。

「完成披露の記者会見がメディアで取り上げられて、すぐに大きな反響があり、現在も様々な団体や企業、自治体などから講演依頼をいただいている」と話すのは、「漱石アンドロイド研究会」で学生たちのリーダー的な役割を務める大学院生の伊豆原潤星氏。

この研究会は、漱石アンドロイドを積極的に活用していくことを目的に2017年に結成された。漱石アンドロイドプロジェ

クトの研究リーダーである山口直孝国文学科教授を顧問に、学生が主体となり、イベントの企画・運営や漱石アンドロイドの動作・音声のプログラミングなどを行っている。

「所属する学生は現在30名程ですが、文学部生に限りません。アンドロイドに興味をもった、という理由で参加する国際政治経済学部の学生もいます。漱石アンドロイドのおかげで、文学に親しむきっかけが広がっています」

アンドロイドから漱石の魅力を知った学生たちが、アンドロイドを活用しその魅力をより多くの人に伝えていく。こうした活動が学生の「発信力」を高める実践の場の一つとなっている。

## 秋葉原の新拠点から社会を動かす

昨今、日本文化はクリエイティブの分野においても存在感を示している。しかし、その背景を十分に理解した上で魅力的にプロデュースできる人材は不足している。こうした課題へのアプローチとして、2017年、文学部に「都市文化デザイン学科」が新設された。文学部において発信力や企画力、表現力を育てる目的とした教育を行い、出版・ジャーナリズムや企画・広報、商品・サービス開発などの分野で活躍する“世の中を動かすことのできる人材”の育成をめざしている。

「都市文化デザイン学科」の設置によって、アニメやゲームなどの最新ポップカルチャーの研究もより発展的に行えるようになった。

また、新学科の情報発信拠点として、ポップカルチャーの聖地、秋葉原に「AKIBA Lab.」を開設した。学生たちが社会に語りかける側に立つとき、再び「国語力」が活きてくる。

言葉の力に裏打ちされた発信力を強みに、二松学舎生は活躍のフィールドを広げていくはずだ。

場所の特性を活かしたフィールドワークなどの授業やワークショップを通じ、社会を動かす仕組みを実践的に学ぶことができる



漱石アンドロイド

二松学舎創立140周年事業の一環として、少年時代に二松学舎大学の前身である漢学塾二松学舎で学んだ文豪・夏目漱石をモデルに、アンドロイド研究の第一人者である大阪大学大学院石黒浩教授監修のもと、漱石の孫にあたる夏目房之介氏と朝日新聞社の協力を得て制作されたアンドロイド。二松学舎大学特別教授として大学等で講義を行っている

# 街に分散する 都心型キャンパスの管理

九段キャンパスは2004年に1号館・2号館が竣工し、5号館まで校舎を増やしている。現在では、千葉県柏市にある柏キャンパスで行われていた授業もすべて九段キャンパスで行えるようになり、学部横断での学びの促進が期待されている。

鹿島建物は、九段キャンパスのすべての校舎と附属高等学校の建物・設備管理業務、清掃業務を行っている。また、秋葉原の地に、学習・文化の発信施設として開設した「AKIBA Lab.」の管理運営も任っている。

## 5年、10年先を読む提案

**長谷川様** この5年で4号館、5号館、AKIBA Lab.と管理物件が3カ所も増えたことは思いませんでした。にも関わらず、管理体制を大幅に変更することなく対応していただいている、感謝しています。

**吉田** 東京の真ん中にこれだけの学びの場が確保されて、学生さんたちにとっては本当にいい環境ですね。建物が街に分散している、という管理の難しさはありますが、巡回の際に大学職員の方とコミュニケーションをとて、気になること、困っていることを吸い上げられる関係をつくるようにしています。

**長谷川様** 鹿島建物さんが大学の一員

という気持ちで動いてくれているので、私たちも大学の一部署に対するような気持ちでいられます。いつも大学の立場でベストな提案をしてくださるので、建物・設備に関して気になることがあれば、まず鹿島建物さんに相談しています。

**吉田** 最近は、修繕計画の話をしていますね。竣工年が建物によって異なるので、1～5号館の電気・空調・衛生設備、床や外壁と、次から次へと耐用年数を迎えている状況です。トータルで、かつ長い目でみたときに、最適な提案ができるよう考え方でいるつもりです。

**長谷川様** 鹿島建物さんが無駄なコストがかかるないように5年、10年先を読んで修繕計画の提案をしてくださるので、かなりコストパフォーマンスのいい修繕を行うことが出来ていると思われます。

**吉田** 二松学舎さんは直す必要があるところはきちんと予算をとって、より長くもつのような工事をしてほしい、という方針ですね。要望を長谷川さんがきちんと伝えてくださるので、こちらも常に同じ視点で建物をみることができます。

**長谷川様** いつもこちらの要望に全力で応えてくれています。驚いたのは、

改修工事で取り外した古い部材や設備の部品をとっておいてくれていたこと。他の建物でも同じ部材をまだ使っている、というのを全部分かってくださっているわけです。

**吉田** 1～4号館については、鹿島建設がつくって、鹿島建物が管理しています。だから、私たちが一番分かっていなきゃいけないと思っています。部材が1カ所壊れた、というときに、古いものだと廃番になっていてもう手に入らないことがあります。そういう時に、取っておいた部材が使えたりするんですよ。部材がないから全部取り換えるなきゃいけない、となると計画

外の工事になりますし、コスト効率も悪いですからね。

**長谷川様** 大規模な修繕工事となると、大学の仕組みの都合上、1年以上前に予算を申請しておかなくてはなりません。上手く応急処置をしながら大規模修繕までもたせてくれているのはありがたいです。私はこれまで設計・施工・管理まで一通り経験があります。鹿島建物さんがいかに大学のために先のことを考えてくれているか、よく分かります。

**吉田** 長谷川さんが当社の提案の成果や頑張りを理解してくださっていて、「修理

の件、ありがとう」などいつも言葉で伝えてくださるので、それが何よりもモチベーションになっています。

**長谷川様** この先もしばらくは修繕を行なながら、使い続けることになります。引き続き優れた提案と安定的な維持管理をよろしくお願いします。

**吉田** 今は若手に改修工事の現場で職人の仕事を見せたりして、工事の分かる人材の育成に務めています。これからも管理事務所のメンバーと一緒に九段キャンパスの環境をまもっていきます。

背景の松の木は、学校名の由来となっている二本の松。中国・唐中期を代表する文人、韓愈（かんゆ）の「二本の松を植え、その松の下で勉強した」（藍田県丞序記）という故事から、二本の松は「学問をする場所」の象徴とされている。中洲も自作の漢文にこの故事を引用し、「余が庭にも二松あり（中略）学舎に命じて二松と曰ふ」と記している

写真左より  
学校法人二松学舎 二松学舎大学 総務・人事部  
総務・人事課 課長補佐 長谷川 直樹 様  
鹿島建物総合管理株式会社 首都圏中央支社 建物管理1部  
二松学舎大学中央管理室 所長 吉田 康寛



いつも最善をめざした管理を

学生さんにとって、教職員さんにとって、大学にとって、一番良い方法は何か。  
いつもそれを軸に考えていると、迷うことなく的確な判断ができる、自信と高いモチベーションをもって仕事にあたることができます。改修工事が増え、学生さんの休みの期間が働き時。春休みや夏休みだけでなく、ちょっとした連休にも工事の予定を組んで、学生生活に支障がないように心がけています。